

園番号 703

令和7年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 一ノ瀬 万起
全園児数 94名

1. 研究主題

“おもしろそう”の芽を育み、“やってみよう”と心を弾ませ遊ぶ子どもをめざして
～子どもの姿から保育者の援助や環境構成の在り方を探る～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

“おもしろそう”と興味をもち、“やってみよう”と心を弾ませ、意欲的に遊ぶ子どもを育むためには、ひと・もの・ことに関わる子どもの姿を見取り、保育者が意図をもって、援助や環境構成の工夫を行うことが大切であると考え。そのために職員間での話し合いを充実させ、多面的に子どもの姿を捉え、次に繋がる保育者の援助と環境構成の在り方や話し合いの方法を探り、保育の充実を図っていききたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

遊びや活動に取り組む子どもの姿を職員間で見取り、話し合い、共有する中で、援助や環境構成の在り方を探り、“おもしろそう”“やってみよう”と意欲的に活動に取り組む子どもの姿に繋げる。

②研究の重点

- ・ひと・もの・ことと関わる子どもの姿から、“おもしろそう”と興味をもって遊ぶ場面を捉え、次に繋がる保育者の援助や環境構成について探る。
- ・子どもの見取りと保育の振り返りの視点を探り、保育者間で多面的に子どもを見る。
- ・保育者間の伝え合いを大切にすることで、子どもの学びや育ちを共有し、同僚性を高める。

③活動の方法

子どもの心が弾む姿

保育者の援助 _____

1、ポストイットを活用して

1枚の写真を見て、子どもの姿や環境構成等について、気付いたことや聞きたいこと等をポストイットに書き込む。その後、担任が子どもの様子や思いを伝えたり、他の保育者から意見を聞いたりする場をもち、遊びや子どもの様子等を共有し、保育に反映できるようにしている。

【事例1】 『水と泥団子、どっちが強いかな?』 4歳児6月

砂場で水を流して遊んでいたA児、B児は、以前C児が砂でつくった団子を波板の上に置き、「水で流すと“どろどろ”になるよ」と団子が壊れる様子を楽しんでいたことを思い出し、同じように砂でつくった団子を波板に置いて水を流し始めた。それを見ていたD児は少し前につくった“固い団子”(泥団子)を持って来て「これだったら壊れな

いんじゃない？」と言って波板の上に置いた。B児がバケツに水を汲み、勢いよく水をかけると泥団子は少し動いたが壊れなかった。A児は「どろどろになってない!」、B児は「今、ちょっとだけ動いた」と言って次々に水を流した。保育者が「なかなかどろどろにならないね」と声を掛けると、D児は「水と泥団子、どっちが強いかな勝負だね」と言って泥団子の真上から水をかけた。泥団子は少し動いたが、まだ壊れず、「お団子がだんだん小さくなってきたよ」「やっぱり固い泥団子の方が強いね」と話しながら、水をかけ続けていた。

ポストイットに記入されていた見取り	担任が感じたこと・気付いたこと
<ul style="list-style-type: none"> ・泥団子の固さに自信があるのかな? つくったものを使って遊ぶ姿に変化している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めは団子をつくることを楽しんでいて、だんだん固さを比べている姿があった。つくるだけで終わりではなく、他の遊びにも使うなどして、遊びが繋がっていることが分かった。
<ul style="list-style-type: none"> ・周りの子ども達に興味をもって眺めている姿から、遊びの深まりを感じた。 ・一人での遊びでは変わっていくことに気付かないけど、友達と遊ぶことで発見、発展があり、おもしろい。 ・バケツを持っている子が3人もいて、友達と一緒に遊ぶことを楽しめるようになっていく姿に成長を感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分だけでなく、友達が流すとどうなるかも気になっている。友達の刺激を受けながら、一緒に楽しさを共有している。 ・それぞれ水を流して遊んでる中で、「どろどろになるかな」「泥団子はどうなるかな?」等と言葉で伝えながら、イメージを共有して遊ぶようになってきたことに気付いた。
<ul style="list-style-type: none"> ・波板をフラットに置いてあるので、流すというよりは泥団子がどうなるのか、変化を楽しんでいるのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・波板がフラットになっていることまでは目が向いていなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・今後、つぶれない泥団子をつくってみようとか、どこまで転がっていくかなど、広がっていきそう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・砂の団子より泥団子が固くて強いことには気付いている様子なので、今後、さらに強い団子がつくれるように場を整えたり、水以外に泥団子と勝負できるものを子ども達と考えたりしていきたい。 〈その後〉 ・泥団子をたくさんつくれるように、泥団子に適した砂や泥がある場所をクラスで共有したり、できた泥団子を見せ合ったりした。また砂場の山から掘った穴に転がす遊びをしていた。

〈反省・評価〉

- 写真を見て、子どもの表情や様子、環境等について、保育を行っていない保育者が、子どもが何を楽しんでいるのか、何をしようとしているのかなどイメージを膨らませながら見取りをしたことで、自分とは違った視点で子どもを見たり、振り返ったりすることができ、子どもの姿や環境構成等を見直すきっかけになった。友達の刺激を受けながらいろいろな遊びに発展できるようになっていることに気付くことができた。

2、ハートの日

遊びの写真を用いて、保育者間で気付いたことや見取った子どもの姿を出し合ったり、実際に保育を見て、子どもの様子や担任の援助、環境構成について話し合ったりする。今年度は子どもが何に興味をもっているのか、翌日からの援助や環境はどうすればいいか等、話し合いのポイントを絞って話をするようにしている。

【事例2】 『ドングリ大爆発や!』 3歳児11月

家から持ってきたドングリや秋探しで拾った落ち葉を使って遊ぶ姿が増え、園庭では透明板やトイを使ってドングリ転がしを楽しんでいた。ある日、長いホースを見つけ、A児とB児が端と端をのぞき合って「ここにドングリ入れたらどうなるかな♪」と遊び始めた。長いホースは魅力的で、その声を聞いて数人の子供が集まってきた。保育者が見守る中、A児とB児を先頭にどンドンドングリを入れていく。「カラカラ鳴ったよ」

「いっぱい入るね」と嬉しそうに言葉を交わしながら、ドングリを入れて、少し待ってホースを傾け、ドングリが出てくるか試し始めた。なかなか高低差がつかず出てくる気配がなかったので保育者が「Aちゃん、上にあげてみる?」「こっちを先生が持ってみようか」と提案するが、何とかして転がし出そうと自分達で試してみる子ども達。その時、A児がホースの先をグルグル回すと勢いよくドングリが飛び出してきた。「わー! ドングリ大爆発や!」「見て、爆発したで!」とA児の大きな声とその場にいた子ども達の大歓声が響き渡った。



〈反省・評価〉

- 長いホースにドングリを入れたらどうなるかな?と試し始めた子どもの発想に共感し、あえて見守ることで、子ども達なりに試したり考えたりする姿が次々に見られ、主体的に遊ぶ姿に繋がった。グルグル回して飛び出すという大人が予想しない偶発的な事象が、子ども達の好奇心をより掻き立て、保育者も一緒に楽しむことで遊びが豊かになることを実感した。

【事例3】 『水流し遊びからドングリ転がしへ』 5歳児5月～11月

5月

保育者の思い

- ・他の保育者からの意見
- ・意見からの環境づくり

A児は友達と「もっと掘って」「まだ水入れやんといいて」「深くなってきた」と言いながら穴を掘っている。深く掘れたことを確かめると、手桶を使って穴に繰り返し水を入れた。横でトイを手にしたB児に「それなら水流しやすそうだね」と保育者は伝え、見守った。



水を穴に入れることを楽しんでいる中で、様々な“もの”を使い、もっといろいろな水流しのおもしろさを感じてほしい

5歳ではあるが、砂場から道具置き場までの距離が離れていて、なかなか自分たち準備してきて組み立てていくとそこまでできないのではないかと。すぐに手に取って試せるという環境が必要ではないかという意見が出た。

6月 (ハートの日からその後)

数人の子ども達が前日の続きの川をつくろうと掘り始めた。タライから直接水を流せるように、トイを川につなげていると、A児が違う所から水を流そうとトイとケースを運び、川に水が流れるようにコースをつくった。それを見ていた他児も水を流し出した。B児がそのトイを「トンネルにしよう」と川からトイをあげて下を通れるようにした。そのことにより、つくった川ではない違う方向へ水が流れ出した。その様子を見ていたC児が「繋げる」と初めにつくった川に繋がるように掘り始め、他児は水を流し続けた。すると流す量が多く新しく掘っていた川が氾濫してしまった。C児「うわあ!もれた!」と言うと、その様子を見ていたA児が「水をちょっとずつ流して」と他児に伝え、聞いたD児・E児が「そおとそおと」と言って調節しながら流した。すると水が川へ流れるようになり繋がった。「やった。繋がった!」とC児。A児はまた水が漏れるかもしれないとシャベルを土にさしていたことで水がしぶきをあげるようになった。「うわあ、水が飛んでる」とF児が喜び、A児はもっと水が跳ねるようにとケースを積み重ね、高さをつけて水を流した。



子どもが“高さ”や高さのおもしろさに気付くにはどんな手立てをしたらいいか…

自分たちで高さをつくって楽しんでいくこともあるが、築山やジャングルジムなどをつかっていくことも一つである。

9月

ケースをたくさん使ってコースをつくり、高さをつけて水の流れる様子を楽しんでいた。その日の振り返りで、保育者が「ケースを運ぶの大変じゃなかった?」と尋ねると「ちょっと大変やった」「何回も運んだ」と出たため、他の方法でもできないかなと投げかけた。「ハシゴはどうか?」という意見が出てきて、A児は「ジャングルジムって使っているの?」と問いかけてきた。一度みんなで試してみようとして共有し、次の日からジャングルジムにト

ジャングルジムの遊びの近くに移動させていたが、遊びに使われることがなかった。子どもたちの中で、意識されていないように感じ、子どもたちと振り返り具体的に考える場をもつようにした。

イをかけて水を流し始めた。「速いな」「砂とどっちが強いかな？」と高さがついたことで水に勢いがついたことに気づき、水と土とではどちらが強いのかを知ろうと試していた。



トイをつなげるために使える洗濯ばさみや子どもたちから出た脚立を近くに用意する。

11月

A児・B児は砂場でドングリ転がしで遊んでいた。「穴に入った」「やったー」と喜んでいたら、B児が「もっとおもしろく転がしてみたい」と言っていたので、保育者が「おもしろくしたいってどうしたらいいのかな？」と尋ねると「ジャングルジムとか使って転がしてみたい」「でもないしな…」と出たため、「じゃあジャングルジムみたいなところはあるかな？」と提案してみた。すると2人は周りを見て「山って使っていいん？」と聞いてきた。「いいよ。面白くなりそうやん」と試せるように声を掛けた。2人がケースやトイを運んでコースをつくっているのを見て、「何してるん」「入れて」と他児も興味をもって集まってきた。長く繋いだことで勢いもつき、ドングリの転がり方の違いに気づき、楽しんでいった。その後も遊びが続き、ドングリを飛ばすようにしたり、トイを分かれ道にしたりするなど工夫して遊ぶ姿があった。



今まで経験したことを活かし、また園庭の環境を使ってダイナミックに遊んで欲しい。

築山を活かして遊べるよう、提案する保育者の人的環境

<反省・評価>

子ども同士で気づき、遊びに必要な物を準備しながら遊んでほしいという思いから、必要最低限の環境の準備しかしていなかった。ハートの日の話し合いから、“5歳ではあるが、砂場から道具置き場までの距離が離れていて、子どもたちの姿からなかなかそこまでできないのではないかな”“すぐに手に取って試せるという環境が必要ではないかな”という意見が出た。話し合いを受け、環境づくりを見直した。遊びが続くうちに子どもたちがすぐに試すようになり、遊びが途切れにくくなっていった。遊びがさらに広がっていくのではないかとジャングルジムや脚立などの環境を整えていくことでより子ども達がやってみたくて心を動かすきっかけになった。遊びが続くことで他のことを試してみようとしていたり、気付いたりして遊びが広がり、自分たちで必要な物を準備し、遊ぶ姿に繋がった。また子ども同士で伝え合うことも多く見られることにも繋がった。

5. 研究の成果

- ・写真を見たり、実際に保育を見たりしながら職員間で話し合いをすることで、遊びの様子や子どもの姿を共有しやすく、子どもの思いや学びに気付いたり、保育者の思いや意図を知ったりすることができた。また新しい気づきや客観的な視点を得ることができ、保育者自身の考えが柔軟となり、そのことが子どもの遊びの豊かさに繋がっていくと考える。
- ・子どもの姿や遊びの様子を出し合うだけでなく、今、子どもたちが何に興味や関心をもっているのか、何を楽しんでいるのか等を探り、次に繋がる援助や環境構成にポイントを絞って話し合ったことで、その姿に合わせた環境を再構成したり、保育者の援助を見直したりすることができ、子ども達の姿にも変化が見られるようになった。

6. 今後の課題

話し合いを通して、多面的に子どもの興味や関心、育ちを捉え、共有し、環境構成や援助の見直しを重ねていくこと、また悩みを共有し合える保育者間の繋がりが、興味をもって活動に取り組む子どもの姿に繋がると考える。保育者間のコミュニケーションを充実させ、関係性を深める中で、様々な意見を出し合い、共に考えながら、意欲的に活動する子どもを育ていけるよう、今後も話し合いのもち方や頻度、方法等、引き続き探っていきたい。